

富岡市中心市街地における歴史的・文化的価値に関する研究

Study on the Historical and Cultural Significance of Tomioka Central Inner District

中山 まりか
NAKAYAMA Marika

1. はじめに

(1) 研究背景

群馬県が推進する富岡製糸場の世界遺産登録に向けた運動は、平成 15 年 8 月に、小寺弘之群馬県知事が「旧富岡製糸場をユネスコの世界遺産にする研究プロジェクトを発足させる」という方針を記者会見で発表したことに始まる。これにより、平成 14 年度に着手されていた「富岡都市計画事業・富岡中央土地区整理事業(約 12.0ha)」は平成 17 年に事業停止、平成 25 年には事業の許可が取り消しとなった。現在では富岡製糸場周辺及び城町通り沿道が歴史的文化的景観保全ゾーンとされ、景観規制が行われている。また、推薦書においてもバッファゾーンとされ、現在は富岡製糸場におけるバッファゾーンとしてのまちづくりが進められ、修景が推進されている。



図 1 飲食店街の修景イメージ(富岡風景づくりガイドより)

2008 年に行われた専門家会議において、バッファゾーンの定義について採択された勧告の一つとして「バッファゾーンは遺産の一部ではなく、遺産を守るためのツールであること」がある。ここにはバッファゾーンの文化的価値や遺産との歴史的関係性の有無は問われてはいない。しかし、本研究の対象地である富岡市中心市街地は、バッファゾーンに属しているだけでなく、富岡製糸場と共に発展し、製糸場との関係が深い場所であり、独自の歴史や文化が存在すると考えられる。また、富岡市はまちづくりにおいて、①富岡製糸場を背景とした街並みの意義や市街地として歴史

を重ねてきた過程、街道の歴史性などを考慮し、街並みの歴史はもちろん、道路の線形や歴史性などを保全する。②歴史的な街並みを保全するための事業手法により、街並みの歴史や雰囲気を残し、横町の機能や景観を大事にする。と唱えており、まちづくりにおいて、この地域の歴史的な研究は極めて重要であると言える。

(2) 研究の目的と方法

富岡市中心市街地には 128 棟の歴史的建造物が現存し、それぞれに調査が行われている。一方で、この地域の発展と富岡製糸場との関わりについての研究は然程進んでおらず、その必要性を感じる一方で、バッファゾーンとして、世界遺産を所持する街としてのまちづくりが進行している。そこで、本研究の目的を以下の 2 つとする。①富岡製糸場と富岡市中心市街地の発展の関係を示す。②市街地(対象地域)の変化から、現存する文化資源を抽出する。

本論文における文化資源とは、「富岡の町にとって歴史的・文化的に価値のある物であり、まちづくりにおいて資源となりえる物」とし、その存在はまちづくりへの手がかりになると考える。

以上を記述する為に、文献資料、地図、聞き取り調査及び現地調査により文化資源の抽出及びその歴史的・文化的価値を示し、現存する文化資源の抽出を試みた。

2. 富岡製糸場とその周辺地域との関係性及び歴史

(1) 官営富岡製糸場建設以前の富岡

富岡町の始まりは、慶長期末、代官中野七蔵が当時瀬下住民の秣場として利用されていた土地に、南牧領採掘砥沢村から採掘されていた上野砥輸送のための中継地・在庫調整地を設置すべく新田開発を行ったことである。上町・中町・下町にはそれぞれ月 3 回ずつ市を立てる事が許され、新田開発は宮崎及び瀬下の住民により行われた。住民の移住に伴って、

5社寺が移住、3社寺が建立され、この街一番の微高地には代官陣屋の建設を予定していた。しかし、中野代官が人事異動により他へ転出してしまったために、代官陣屋は着工されることなく、予定地のみが残され、明治3年、官営模範工場・旧富岡製糸場がここに建設されることとなった。

(2) 富岡製糸場の建設

米国ペリー艦隊の来航によって安政元年、日米和親条約が調印され、次いで安政5年、修好通商条約が大英帝国・ソビエト連邦・フランス・オランダと結ばれたことから、翌6年には神奈川・長崎・箱館の三港が貿易港として開港された。当時、海外への貿易品としての輸出品は圧倒的な割合で蚕糸類であったため、明治政府は生糸に焦点を当て、生糸生産の増加と品質向上を試みることにし、明治3年、生糸の官営模範工場建設を決定した。製糸場の敷地として、江戸時代から養蚕業が盛んな地域で優良な原料繭が確保でき、付近の生糸の取引の中心地であった事などの理由から富岡町が選定された。

絹の市として栄えていたと言われる富岡町であるが、建設が開始される直前の人口は1756人、戸数437戸と小規模な街であり、この街に当時では最大規模の工場が建設されるという事は町人にとってかなり大きな出来事であったことは容易に考えられる。

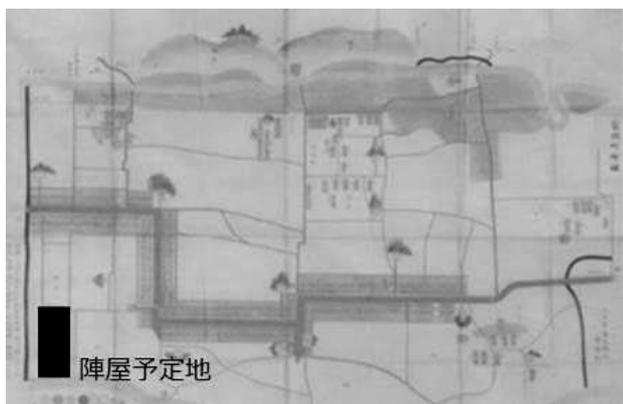


図1 富岡町絵図(明治3年)

(3) 街における工女の記録

製糸場を運営するために最も重要でかつ人数が多かったのは工女である。彼女たちの記録を探る事で、工女と町の関わりを整理し、町に存在した要素の一部を明確にした。

(i) 映画館及び劇場

工女の休日の要素として映画館がある。春の休みには製糸場が中村座を貸し切りにして演芸会を行い、その他の休日にも工女が個人で映画や舞台へ通った

という。富岡の街における最初の舞台は中村座であり、この中村座は明治9年、近藤きんにより、製糸場が工女募集のために娯楽設備を必要とするという発想の元、町内の葦塚亀吉土地の提供を及び、製糸場の廃材の抛出を受け設立された。中村座は富岡の街における劇場の草分けとなり、大正時代になると中村座の周辺地域に映画館等が建設された。こうして、製糸場から見て北東部は娯楽のエリアとなり、映画館により賑やかとなった通りは銀座通りと呼ばれるようになった。

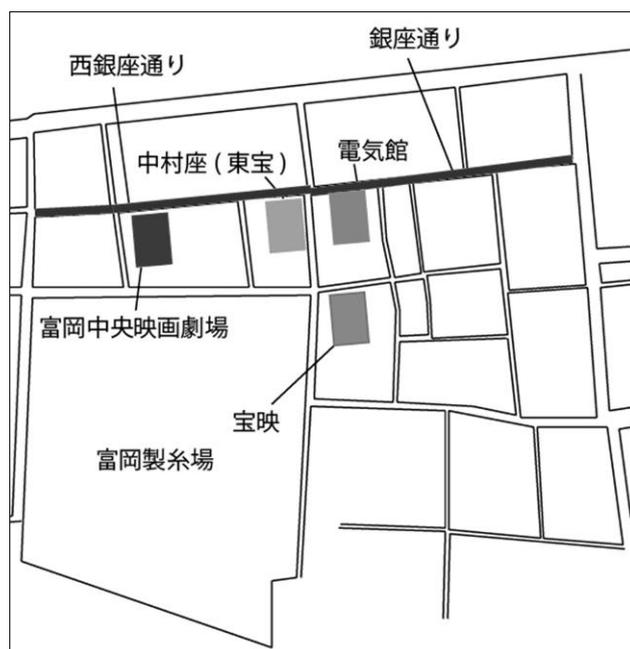


図2 昭和後期の映画館の位置

(ii) 甘楽教会

日本基督教団甘楽教会は明治17年に甘楽第一キリスト教会として南後箇村に設立され、茂木平三郎が伝道師として牧会にあたった。その後明治38年8月21日には、製糸場で働く少女青年のために集いが開かれ、工女や青年達の休日である1日には説教および唱歌の練習や集会が開かれた。出席者は9名であったという。また、甘楽教会の教会員達は、廃娼運動や女子学校の設立などの女性教育及び女子の人権回復のために尽力した。さらに、甘楽教会は大正10年から続く幼稚園を併設し、現在も変わらず経営を続けている。以上より、甘楽教会は富岡の街の歴史の中で重要な要素であり、文化資源と言える。また、甘楽教会の石造チャペルは富岡市の行った調査により、歴史的建造物・洋館とされている。

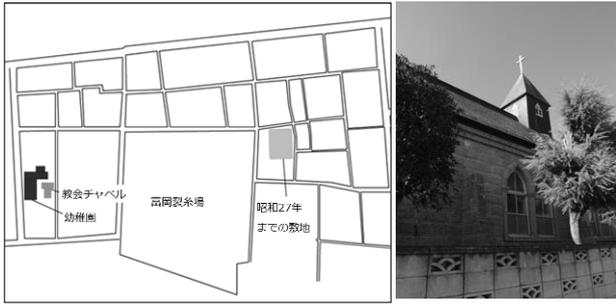


図3 甘楽教会の立地及び外観

3. 富岡市中心市街地における要素とその歴史

現在の富岡の中心市街地は主に商店の多いエリア、住宅の多いエリア、飲食店の多いエリアの3要素に分けることができる。



図4 富岡市中心市街地のエリア分け

(1) 商店についての記録

商店街については明治 37 年に作成された富岡県営業便覧というものが存在し、これに明治 37 年の富岡市中心市街地に立地していた商店が記載されている。この便覧と昭和 49 年の商店街を比較しているのが井上(1977)^{注1}である。富岡町の商店は下町から順次盛衰をくりかえし、昭和 49 年の時点では上町・横町(宮本町商店街)が中心となり、上町 61 店舗、横町 57 店舗、中町 41 店舗の商店が商店街を構成している。これは明治 37 年の時点から全体で 26.7%、減少している事になる。また、上町・横町に中心機能が移行、景観的には横町が中心であり、この原因は明治 30 年に開通した上信電鉄の上州富岡駅の立地によるものだと考えられている。

江戸時代から明治時代にかけては生産地集荷問屋が中心であったが、商店街の大半を占めていた繭商・砥石商の衰退により、一般小売商の立地が増大、人口増加にともない、日用品・食品が必要となり、商店の用途は変化し、町割りも変化している。

商店の業種からも商店の主な顧客は周辺の町の住

民や、富岡の町の住民である。工女との関係や、製糸場との関係よりもそちらの要素が強く、また製糸場の建設により発生したエリアではなく、市が根源にあるエリアである。

(2) 遊興・飲食店エリアについて

このエリアは、製糸場と隣接している事や路地が入り組んでいる事から、まちづくりにおいて重要とされているが、研究が進んでいないエリアである。文献による調査が困難であったため、聞き取り調査を行い、その結果このエリアには女郎屋が存在していた事、花街、赤線地域であった事が判明した。また、これらを製糸場職員及び、養蚕農家、商人が利用していた事から、製糸場との繋がりがあったエリアであると言える。

(i) 女郎屋

一時は女郎館が完全に追放されたと言われているが、昭和 10 年以降にはいくつかの女郎屋がこのエリアに存在し、少なくとも萬世閣・三好テイ・竹屋という女郎屋が位置していた。これらは昭和 33 年の売春防止法の施行により閉店を余儀なくされている。一方、女郎屋として利用されていた建物の一部は現在も住居として残され、住民が暮らしている

(ii) 赤線地域

赤線地帯は昭和 21 年、公娼制度の廃止により各地に出現した地域である。富岡町における赤線地域が旧遊郭に由来するかは今後さらなる調査が必要であるが、少なくとも昭和 10 年には女郎屋が存在していたため、戦後の闇市から築かれた街区ではなく、戦前から続く遊興エリアであった事は明らかである。

(iii) 花街

花街の中の発生は江戸時代中期といわれ、花街の世界「花柳界」という言葉は、唐代の詩人・王勃(おうぼつ)が美しいものを詠った「花紅緑柳(花は紅、柳は緑)」に由来するといわれている。花街は、顧客が待合にやって来ると、待合の女将が要望に応じて料理屋から仕出し料理を取り、置屋から芸者を呼んで接待するという三業の独立分業の上に成り立つ日本独自の遊興に関する文化の 1 つである。

昭和 58 年頃まで富岡の町にも花街が存在し、芸者遊びが行われ、最大 38 名の芸者が置屋に席を置いていた。昭和中期頃までの富岡における花街文化は頗る栄えており、結婚式も芸者の活躍の場であり、料理屋は朝 10 時から営業を始めていたため、人気の芸者は朝早くから忙しくしていたという。また、こ

の頃の富岡における芸者遊びの様子は、昭和 32 年に富岡の街で撮影された「坊ちゃん特ダネ記者」^{注2}で確認する事が出来る。



図 5 富岡の芸者衆

富岡の芸者遊びを行う料理屋は割烹旅館美濃久・萬屋・源氏屋・藤屋が主でありその他に玉つたとごげんがあった。この遊興・飲食店エリアにおける花街は、群馬出身の歴代総理大臣らや、富岡の街の商人、甘楽や下新田の住民にも利用されており、この地域を代表する遊興エリアであった。製糸場との繋がり、文化的側面があり、また富岡の街以外から芸者となる為に富岡の街へやってきた人々の生業の場でもあった事を考慮すると、富岡における花街文化は文化資源であると考えられる。

(iv) スナックバーとコンパニオンの出現

昭和 30 年中頃よりこのエリアにスタンドバーやスナックバーが現れ始め、それに伴いコンパニオンが出現した。これにより富岡の花街文化は衰退し昭和 58 年頃富岡の街から芸者が姿を消した。

4. 昭和 45 年以降の遊興・飲食店エリアにおける変遷・及び現状

(1) 地図からみた変遷

富岡中心市街地における遊興・飲食店エリアについて住宅地図の存在する昭和 45 年から平成 25 年度

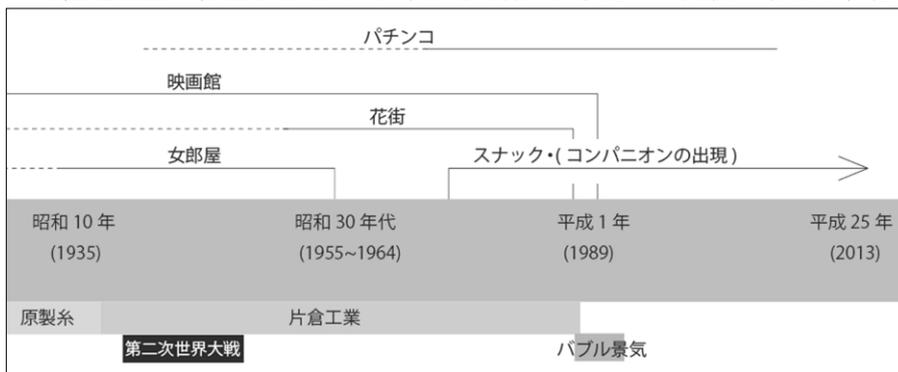


図 6 遊興・飲食店街における変遷

のデータを用い、5 年毎のエリアにおける変遷を追った。また、第 3 章における聞き取り調査の中で、片倉工業が衰退し、昭和 62 年に操業を停止した後も、遊興・飲食店エリアはその他の富岡に存在する工業(製造業)の発展の影響で賑わっていたことが判明している。

(i) 昭和 45 年

片倉工業が操業を停止する 17 年前であり、比較的大きな建物として映画館、銭湯、パチンコ屋があり、娯楽エリアの特性が受け継がれている。また、芸妓組合の名前確認する事ができ、芸者遊びの盛んであった割烹旅館美濃久の名も見ることが出来る。一方、このエリアにスナックバーが現れるようになった後、社交場として最も栄えたスナックバーであるジプシーがコンペジプシーという名で現在の立地と同じ敷地に存在している。

(ii) 昭和 52 年～平成元年

映画館がなくなり、富岡芸妓組合の建物も空き家となり、スナックの入れ替えが見られる。

製糸場が閉鎖したことによる、急激な変化は見られず、区画内における店舗数も変化が非常に少ない。片倉工業の寮がなくなり、長屋に空き家が出始め、城町通り沿いの長屋が商店から住居に変化した。

(iii) 平成 6 年～平成 15 年

新しくビルが建ちその中にスナックバーが入っている。(3 軒 13 店舗) 以上及び聞き取り調査により、この時期が富岡の街におけるスナックバーの最盛期であったと考えられる。

一方で、パチンコ屋の衰退がみられ、平成 15 年には現存する唯一のパチンコ屋が建て替えられており、娯楽エリアとしての特性が薄れている様子が分かる。

(iv) 平成 21 年～平成 25 年

富岡製糸場見学者用の駐車場及びお休み処 - 富岡製糸場前や、富岡工業製品常設展示場等の製糸場



図 7 年代別残存図

訪問者の向けた施設の建設や改装が見られる。また、スナックの入れ替えはこの時期にも頻繁に起こっており、2009年から2013年の間に変化が見られた13件の物件のうち8軒がスナックバーであることから、スナック街としての要素は、一部において今の所顕在であると言える。

(vi) 地図による変遷

昭和45年当時から残存している店舗のうちスナックバーは4店舗、その他には雀荘1店舗及び飲食店6店舗、サービス業が10店舗で住宅が最も多い結果となった。また、1977年～2013年までの間で所有者もしくは店舗名が変化していない建物は空き家を含め全体の35%である。

(2) 料理屋の現状

芸者遊びを行っていた和来屋源氏、萬屋料理店、割烹藤屋は現存し、料理屋として機能している。現存する3軒のうち、和来屋源氏と萬屋料理店はインターネット上でホームページを作成し、各々の情報を公開しているが、富岡の花街については触れていない。和来屋源氏は平成15年にリニューアルオープンし、屋号もこの時に変更され、現在の富岡の飲食店街での経営に向けた工夫を見ることが出来る。



図8 現存する料理屋

花街の文化の一角として現存する3軒の料理屋は富岡の遊興・飲食店エリアに花街の文化が存在していた事を示す重要な文化資源であると言える。

5. まとめ

本研究により明らかとなった事項として、①現存する文化資源に甘楽教会がある。②富岡市中心市街地における遊興・飲食店エリアには日本独自の花街文化が存在し、その一角を担っていた料理屋は3軒が現存しており、これらは富岡の町における文化資源である。③かつての花街文化の上に現在はスナック街が形成され、これは土地の持つ遊興エリアとし

ての特性が受け継がれていると言える。④聞き取り調査呼び地図データの調査により、一部スナックはある程度繁盛している一方で、昭和時代から続くスナックや飲食店の中には、バブル崩壊以降の景気の低迷により、ここ10年程前から経営が厳しくなっている店舗も存在し、空き家も目立ち始めている。

今後さらなる追求が必要な点として、現在の遊興・飲食店エリア(スナック街)に関する歴史的文化的価値の証明の明確化とその特徴の抽出が挙げられる。

6. おわりに

(1) 文化資源としての可能性

文化庁は平成18年に「採掘・製造、流通・従来及び住居に関連する文化的景観の保護に関する調査研究会」を設置。この研究会による計6回の検討がまとめられ、平成22年に公表された「採掘・製造、流通・従来及び住居に関連する文化的景観の保護に関する調査研究(報告)」が作成された。この中の調査対象に「街区・界限・場」があり、これは都市等に存在する固有の場所が造り出す景観で、独自の性質を持つものとし、例としてアーケードや商店街の街区、横町などを挙げている。さらに、この「街区・界限・場」の分類において、主に生業に関わる街区・界限・場として「盛り場・遊興地」があるとしている。つまり、盛り場・遊興地は我々の生業の中で確立された文化的価値のある場という事になり、今回の研究対象地である富岡市中心市街地における遊興地はこれに値する可能性が高い。さらに、富岡の中心市街地における遊興・飲食エリアは製糸場に繭を納めに来た農家の人々に利用され、昭和の時代にも片倉工業を訪れた営業の会社員達の憩いの場でもあったという事から、製糸場と繋がりを持っていた。

また、片倉工業が操業を終えた後は、富岡の工業と共に独自に発展を遂げたエリアであり、富岡の遊興の場としての独自性が現在でも備わっている。さらに、地方から製糸場へやってきた工女達と同様に、芸者になる為に富岡にやってきた女性たちの生業の場であったため、富岡市中心市街地において、遊興・飲食エリアは文化資源と成りえることが期待される。



図8 現在の飲食店街路地の街なみ

(2) 世界遺産登録を期待して

平成26年6月15日、ドーハで開催予定である第38回世界遺産委員会において、「富岡製糸場と絹産業遺産群」の審査が行われる。富岡製糸場は世界遺産として登録された際には観光客が年間71万2千人（24年度比約42万4千人増）に上ると大幅な増加を予測しており、この地域は世界遺産と切り離すことの出来ない関係となる。バッファゾーンとしてのまちづくりが進んでいく中で、このエリアの歴史的・文化的価値がさらに活かされるようなまちづくりが進められていく必要がある。

また、今回の聞き取り調査の中でスナックや居酒屋においては観光客による経済効果が今の所見られていない事が判明している。一方で、それらの経営状況は厳しく、富岡市における工業の流出や人口減少を考慮すると、今後さらに経営が厳しくなることは大いに予想出来る。このエリアが文化資源としての可能性を持つ以上、その文化的価値は損なわれるべきではない。そこで、今後齎されるであろう、富岡製糸場への観光客による経済効果を取り入れる事が、遊興・飲食店エリア存続の解決策になり、その為のまちづくりが必要となる。

(3) まちづくりへ

富岡市では世界遺産登録運動をきっかけとして、現在まちづくりや製糸場の保存活用について、観光について等の数多くのプロジェクトが遂行されている。その中の一つに「富岡まちづくり・人づくりプロジェクト」がある。これは、住民が主体となった持続可能なまちづくりを考える為のプロジェクトであり、平成24年6月18日富岡まちづくりワークショップを第1回目とし、現在では情報発信チーム、プログラム開発チーム、人と場チーム、アートとものづくりチームに分かれて活動を行っている。この

プロジェクトの特徴は富岡に暮らす住民が尽力しているという事である。彼等がコアとなり、その他のプロジェクト、及びプロジェクトに参加していない住民たちを“交流”を通して結び付けていく事が、現在の遊興・飲食店街をまちづくりへ巻き込む解決策となると考える。

参考文献

- 1) 新井直樹：「近代化遺産を活用した観光振興とまちづくり-世界遺産プロジェクトの展開と課題」、地域政策研究8、(3)、pp.201 - 218、2008.
 - 2) 吉田国邦・西山徳明：「世界文化遺産におけるバッファゾーンに関する研究～兵庫県姫路市を事例として～」日本建築学会九州支部報告書第49号、pp. 377 - 380、2010
 - 3) 富岡製糸場誌編さん委員会：『富岡製糸場誌(上)』富岡市教育委員会、1257pp、1977
 - 4) 富岡市教育委員会：『旧富岡製糸場建造物群調査報告書』富岡市教育委員会 116pp、2006
 - 5) 加藤政洋：『敗戦と赤線、光文社、248pp、2009
 - 6) 浅原須美：『お座敷遊び - 浅草花街 芸者の粋をどう愉しむか』光文社、pp230、2003
 - 7) 高崎経済大学付属産業研究所：『群馬・地域文化の諸相-その濫觴と興隆』日本経済評論、338pp、1992
 - 8) 日本基督教団甘楽教会：「甘楽教会百年史」日本基督教団甘楽教会、506pp、1989
- 注1) 井上雅一：「地方小都市における商店街の形成と変貌—群馬県富岡市富岡町の場合」、都市の歴史地理、pp.215-238、1977
- 注2) 坊ちゃん特ダネ記者 監督：近江俊朗 主演：宇津井健
1957年に製作された邦画である。富岡市もフィルムを所有しており、平成25年11月17日に開催されたスマとみ社会実験でも公開された。